

## 平安な義の実を結ぶ

平 弥悠紀

奨励者紹介〔ひら・みゆき〕

同志社大学日本語・日本文化教育センター教授

〔研究テーマ〕日本語学／日本語教育

およそ鍛錬というものは、当座は喜ばしいものではなく、悲しいものと思われるのですが、後になるとそれで鍛え上げられた人々に、義という平和に満ちた実を結ばせるのです。

（ヘブライ人への手紙 12 章 11 節）

ただいまご紹介にあずかりました、日本語・日本文化教育センター教員の平でございます。

私は、1999年に同志社大学に留学生別科という日本語教育機関が開設された時に、専任講師として着任いたしました。その後別科は2007年に、日本語・日本文化教育センターとして再編され、グローバル・コミュニケーション学部を除く全学の日本語教育を担う組織となりましたが、引き続き今日まで、協定校からの留学生と同志社大学に在籍する学部・大学院の留学生に日本語を教えてまいりました。月日の経つのは早いもので、同志社大学で日本語を教えるようになって24年半の歳月が流れ、同志社での教員生活も残り1年半で定年を迎えようとしております。

### 時間と空間を超えた無限なるもの

私自身のこれまでのこととお話しさせていただきますと、私の生まれた家の宗教は真言宗で、キリスト教とは全く無関係な世界で育ちました。小学生の時、家族で団欒中に祖父が突然心不全で亡くなり、初めて「死」というものを認識しました。大好きだった祖父のために、子供ながらも一生懸命お経を覚え、お墓参りも欠かさず、家族や親戚と泊りがけで高野山にお参りに行ったこともありました。亡くなった祖父はどこに行ったのか、人は死後どこに行くのかは、探し求めても見つからない課題となりました。

いつしか解決しない問題について考えるのをやめておりましたが、大学時代に仏教学の授業を履修し、浄土真宗について学ぶようになりました。私にとって毎回の授業はまさに「目から鱗」といったもので、聞いているうちに、私たちは時間と空間を超えた無限なるものに生かされている存在だと気づかされました。それならば、「時間と空間を超えた無限なるもの」とは何なのか、それを知りたいと願うようになりました。ちょうどそのころ、一人のクリスチャンの方と知り合い、聖書についての学びをするようになりました。そして、聖書に書かれている神様こそ、全世界を創られ、また、歴史を支配されている「時間と空間を超えた無限なる存在」であると確信しました。

大学卒業後、日本キリスト教団の教会に導かれ、ちょうど今から40年前に洗礼を受けました。その後同志社大学大学院に進学し、1999年に別科が開設された時に、同志社で教鞭を執る機会を与えられました。

少し長い前置きになりましたが、神様の不思議なご計画によって、若い頃の自分が想像だにしなかつ

た場所に導かれ、本日のチャペルアワーでこうやって皆様の前でお話しする機会を備えていただきましたことを、心より感謝しております。

### 試練はだれにもある

留学生別科は、1999年の開設時にはとても小さな組織で、交換留学生、私費留学生合わせてわずか17名からのスタートでした。その後留学生数は増加を続け、現在日本語・日本文化教育センターでは、毎学期約250名の留学生が日本語や日本文化を学んでおります（最も多くの留学生を受け入れていた時期には約350名が在籍していたこともあります）。

このような大きな組織に発展しましたが、今日までの歳月、一口に24年と申しましても、改めて振り返ってみますと、個人的にも、また仕事の面でもさまざまな出来事がありました。どうしようもない出口の見えない苦しみ、悩み、試練の中で励まされた聖書の言葉を今日の聖句として選びました。先ほど朗読していただいた聖句を、口語訳聖書（以下本稿での聖句は口語訳聖書からの引用）でもう一度拝読いたします。

すべての訓練は、当座は、喜ばしいものとは思われず、むしろ悲しいものと思われる。しかし後になれば、それによって鍛えられる者に、平安な義の実を結ばせるようになる。

（ヘブル人への手紙 12章 11節）

本日いただいたこの時間の中で、試練の時に、前を向いてもう一度歩み出す勇気を得るために、何かヒントになることを神様が示してくださり、また私自身も天からの励ましを願いつつ、お話しさせていただきたいと思います。

まず、当たり前のことと言えばそうなのですが、「試練は誰にでもある」ということです。

40年前にクリスチャンになった時には、これからはいつも神様に守られて、人生を歩んでいけたらどんなにすばらしいだろうと思いました。特に、精神的な面で、それ以前の私からどれほど大きな変化が起こるのだろうかという期待を抱いてクリスチャン生活を始めましたが、精神的にも、また物理的にも、何らの変化も感じることなく、ある意味平穏無事に、恵まれた日々を過ごしておりました。

しかし、年を経るにつれて、自分自身や家族の健康上の問題、年老いた両親の介護の問題、更には経済的な問題、人間関係のトラブル、仕事上の問題、後から後から、時にはいくつかの問題が同時に、これでもかというくらいに押し寄せてきました。

困難や苦難の中には、自分が努力してよい状況に変えることのできるものもあれば、自分の力ではどうしようもないものもあります。もう少しがんばれば解決できたり、克服できるものを、早い段階であきらめてしまうのは残念な気がします。もう少し頑張ってみるべきか、あるいは固執しないで方向転換するべきか、それを見分けるには神様からの知恵が必要ですが、自分の力ではどうすることもできないような出来事は結構多いのではないのでしょうか。

以前は、日曜日に習慣のように教会の礼拝に通い、語られるメッセージに耳を傾け、心に残った聖書の言葉をピックアップして、心に留める程度のクリスチャン生活でしたが、自分がどうしようもない状況に

追い込まれてはじめて、その解決のための答えを聖書の御言葉の中に真剣に求めるようになりました。

### 必ず逃れることができる

「これらのことをあなたがたに話したのは、わたしにあって平安を得るためである。あなたがたは、この世ではなやみがある。しかし、勇気を出しなさい。わたしはすでに世に勝っている」。

(ヨハネによる福音書 16 章 33 節)

聖書に「あなたがたは、この世ではなやみがある」と書かれている通り、生きている限り、必ず悩みや試練の時はあります。しかし、同時に、神様は実に多くの励ましの言葉を語りかけ、そればかりか希望を与えてくださっています。

あなたがたの会った試練で、世の常でないものはない。神は真実である。あなたがたを耐えられないような試練に合わせることはないばかりか、試練と同時に、それに耐えられるように、のがれる道も備えて下さるのである。

(コリント人への第一の手紙 10 章 13 節)

それ以前にも読んで知っていた聖書の言葉ですが、平穩無事に過ごしていた時には、いい言葉だなという程度の受け止め方しかしていなかった聖句が、深く心に迫って、大変な中にある今の私への正に励ましのメッセージだと受け止めることができました。

「悩みの日にわたしを呼べ、わたしはあなたを助け、あなたはわたしをあがめるであろう」。

(詩篇 50 篇 15 節)

逃れる道を備えてくださっており、そして、助けてくださることが約束されています。何よりもイエス様は、「勇気を出しなさい。わたしはすでに世に勝っている。」と勝利を宣言されているのですから、これほど心強いことはありません。心の中にしっかりと御言葉を蓄えることが、困難の中を歩み続けるための大きな力となることを学びました。

### 試練には目的がある

そして、次に気づかされたことは、「試練には目的がある」ということでした。

なぜこのようなことが自分に起こるのか、それには何か意味があるのでしょうか。

「わたしの子よ、

主の訓練を軽んじてはいけない。

主に責められるとき、弱り果ててはならない。

主は愛する者を訓練し、

受け入れるすべての子を、

むち打たれるのである」。

あなたがたは訓練として耐え忍びなさい。神はあなたがたを、子として取り扱っておられるのである。

(ヘブル人への手紙 12章5—7節)

神様は「わたしの子よ」と語りかけてくださっています。私たちを愛し、子として扱ってくださっていることを理解しました。

引き続き、ヘブル人への手紙には、こう書かれています。

肉親の父は、しばらくの間、自分の考えに従って訓練を与えるが、たましいの父は、わたしたちの益のため、そのきよさにあずからせるために、そうされるのである。 (ヘブル人への手紙 12章10節)

私たちの益のため、そして神様のきよさにあずからせるために訓練されているのだと書かれています。創造主である神様がそうおっしゃっているなら、それが真実であることは明確だと受け止めました。

キリスト教などとは全く無関係に、むしろ神を否定して自分勝手に生きてきた私が罪許されてクリスチャンになり、主の建てられた同志社大学に導かれました。留学生にとって日本語をどれほど身に付けているかは、将来を大きく左右する重要な能力の一つだと考えますが、その教育に当たらせていただけることは、常識的に考えれば、私のような者には全くあり得ないことだと思います。岡山県の小さな田舎町に生まれ、将来日本語教師になりたいなど考えたこともなかった私が、同志社大学で日本語を教えることができるのは、正に奇跡とも言うべきことだと思います。どんな小さな者でも用いてくださる神様のご計画の不思議さに思いを馳せる時、感謝しかありませんでした。

置かれた状況はとても喜べるようなものではなく、実際喜びの感情など湧いてくるわけではありませんでしたが、今はわからなくても、きっといつか、あの時の経験はこのことのためだったのだとわかるのだろうと、ここまで導いてくださった神様を信じて、与えられた仕事に集中しようと心を決めました。悩みや困難に出くわしても、どこまでも神様についていこうと決めました。

その後も、何かしらの問題はあったのですが、とうとう数年前、職場で精神的にダメージを受けてしまい、一時仕事のままならない状態にまで陥ってしまいました。同僚の先生方に授業を助けていただいたり、学生たちにも心配をかけてしまう日々がしばらく続きました。

### 困っている人を見つけてその人のために何かをする

苦しい状況の中で、ふと周りに目をやると、このような私を一生懸命支えてくださろうとする人たちに囲まれていることに気がつきました。出来事にはばかり目をやっている時には気がつかなかったのですが、自分がどんなに恵まれているのか気づかされました。つまらない出来事に巻き込まれて自分を見失い、周囲に心配をかけながら時間だけが過ぎていくのは、いい加減ばかばかしいことのように思えるようになりました。

どうしようもない状況にあっても、きっと神様が何とかしてくださると思い、文字通り重い腰を上げて、あ

る日大学の研究室に戻ってきたら、扉に一枚の紙が貼ってありました。それには、「お母さん、お帰りなさい」と書かれていました。それは仕事に復帰することを喜んでくださった同僚の先生と学生たちからの励ましのメッセージでした。当時、留学生別科生からは「日本のお母さん」と呼ばれていたからです。

先生方や学生たちの優しさに触れて、力がわいてくるのを覚えました。大変な出来事にあっても、周囲に支えてくださる方を神様はちゃんと備えてくださっていたことに感謝しかありませんでした。これからは、私を必要としてくれる人のために、私の時間も、神様が与えてくださった賜物も全て使おうと決心しました。私を必要としてくれる学生たちがいるなら、その一人ひとりに、もっと丁寧に向き合っていきたいと願うようになり、学生たちとの関わりが以前にもまして深まり、私はもう一度立ち上がることができたように思います。

「お母さん、お帰りなさい」という紙はその後何年か大切に扉の内側（研究室の中）に貼ったままにしておりましたが、元気になった今では宝物として、大切にしまっています。

日文センターに来るほとんどの学生は半年<sup>ないし</sup>乃至は1年の留学予定で来日します。学生を毎学期受け入れ、同志社での留学生活を生き、活躍してくれる姿を心に思い浮かべながら送り出します。学生たちが将来活躍する姿を、実際に自分の目で見ることがほとんどないのですが、中には留学を終えた後、数年経って何かの折に訪ねてくれる学生もおります。同志社での留学生活がその後の人生に大きな意味を持ったことを知るのには、何物にもかえがたい喜びであり、神様からの大きな励ましです。

これといって大きな問題もなく漠然と生きていた時にはわかりませんでした。誰かのために自分の時間や労力を使えば使うほど、神様は豊かに祝福してくださるのだと気づかされました。

### 状況ではなくそれに対処する自分を変えることはできる

そんな学生たちとの関わりも2019年に発生した新型コロナウイルス感染症の拡大によって大きく変化してしまいました。2020年には世界中に広がり、留学を希望する学生も、日本に入国できなくなりました。大学の授業はオンラインになり、多くの学生は留学をあきらめました。既に日本に入国していた学生と、海外にいなから、それでも日文センターの授業を希望する数十名の学生たちが、時差の問題を抱えながらも、何とかがんばって一つのクラスで日本語の勉強を続けました。

感染の広がり具合を見て、国費留学生は徐々に入国を許されていき、ホテルでの隔離生活の末に京都にやってくるができるようになりました。交換留学生等は、これが留学と言えるのかどうか、はなはだ疑問ではありましたが、オンラインで授業を続けました。大勢の学生が留学できない状況の中で、入国できた学生は、今ここにいることが奇跡だし、いまだ来ることのできない学生がいることに心を痛めていると話していました。

国費留学生がいるクラスは、教室で対面授業を行う中に、未入国の学生がオンラインで参加するというハイブリッド形式で授業を行いました。入国できた学生は、なかなか入国できない学生を励ましながから、そして入国できない学生も不平不満を漏らすこともなく、互いを思いやりつつ、日本語や日本文化の学びを続ける学生たちの健気な姿に、胸を熱くさせられました。

クラスメートの最後の一人がやっと入国できて、初めて教室に全員がそろった時のクラスでは、だれも

が神様の恵みに感謝せずにはいられませんでした。これまで当然のことのように思っていたことが、決して当たり前などではなく、神様がこの状況を許してくださったからこそその恵みだと受け止めることができ、感謝でした。

学期の最後の授業で、「コロナ禍での留学生生活を今後の人生にどのように役立てるか」というテーマで、クラスで一言ずつ発表し、それを文章にまとめるという課題を出しました。クラスでの発表の時間、最初はなかなか発言しようとしなかったのですが、発表の口火を切った学生の言葉に、クラスメート全員がはっとさせられたように思います。それは、このような内容でした。

「日本人と交流したり、いろいろな所に旅行に行ったりしたかったのですが、感染症が広がっている状況ではそれは無理なので、できる範囲で、できることを精一杯やってみたいと思って、自分なりに頑張りました。これだけの経験があれば、将来、たいいていのことは乗り越えられると思います」。

それまでどう話そうか考えていた学生たちも、その学生に続いて次々と発言しましたが、留学したことの意味を感じなかったといった発言をする学生が一人もいなかったことに驚かされました。そればかりか、学生たちの発言を聞いているうちにこちらが励まされていくような気持ちにさえなりました。コロナ禍にある状況を不運なことと捉えて不平不満を言うのではなく、減多にできない経験として前向きに捉えることを選んだことに、感動を覚えました。

「身に起こった出来事や、置かれた状況はコントロールできないけれども、それに対してどう反応するかはコントロールできる」—出来事に焦点を当てるのではなく、どう対処するかに焦点を当てることで、自分の思いが変化し、経験するべきごとの意味が全く変わってくることを知りました。同じ出来事でも、不幸の種にもなれば、かけがえのない貴重な経験にもなるのだということを、学生たちに教えられたように思います。

どのような留学生活であれ、日本留学が学生たち一人ひとりの人生において大きな意味をもつに違いないと確信しました。そして、素晴らしい学生たちの教育にかかわることができたことを誇りに思い、学生たちとの関わりは、私にとって生涯の財産となりました。

### 感謝を選びとる

コロナ禍での留学、コロナ禍での日常生活を経験して、今まで当然と思っていたことが実は当然のことではなく、神様の恵みと許しの中で与えられたものであったことを知り、感謝の足りない者であったことを恥ずかしく思いました。

感謝の感情は湧いてこない、絶望的な状況にある自分をかわいそうな人だと評価することを選ぶのではなく、置かれた状況の中で精一杯人生を楽しむほうを選びとった学生たちのように、この経験はいつかきっと自分の人生に大きな意味を持つために神様が愛をもって教育し、しばらく訓練をされているのだと信じて感謝し、神様に信頼することのほうを選び取りたいと思いました。

### 平安な義の実を結ぶようになる

「すべての訓練は、当座は、喜ばしいものとは思われず、むしろ悲しいものと思われる。しかし後になれば、それによって鍛えられる者に、平安な義の実を結ばせるようになる」(ヘブル人への手紙 12章 11)

節)と聖書に約束されているように、神様は、私たちに、試練を通して平安な義の実を結ばせてくださるのだと信じて歩もうと決めました。

私の残りの人生がどのようなものであるかは神様しかご存じないことですが、このような私に何か役割があるなら、どうぞ神様、あなたのために自由に使ってくださいという気持ちで歩み、いつの日か神様に、スリルとサスペンスに満ちたこの世での旅路を本当に楽しかったと報告できるように生きていきたいと願っております。

本日は、拙い証に耳を傾けてくださり、感謝です。

ご清聴、ありがとうございました。

2023年 10 月4日 今出川水曜チャペル・アワー「奨励」記録